芭蕉翁附合集

三

芭蕉翁附合集巻之二

雪や候よ蠶見らる掾の元　芭蕉翁

白もきらくよ屋敷のうら　支考

菊入れ出すふと入と見せけり　仝

麁そ[illegible]ゆ幕中の川し　翁

村かくれ月見くよ鳴て居る　仝

風も吟みよ芭蕉の葉丸葉　考

雪の舎主かくる時机をと　考
書よれるあるも所なる　伯　翁
ムウ〳〵と書る物を吟ず　今
風うよれを法師　鉢　今
二三ヶ所のいとまなきく　考
鏡をたて見遣る点　今
見苦しい行燈つる者の月　翁
機嫌ハ角力元の常ヒ　今

行水の四〳〵ゆく丁の時連く　考
黄昏の星もまさひとつる　今
此仕小雪陰ら砂も　花　翁
白い使しまの花入　今
陽炎の傘干ス例ハ綿ハ　考
手紙を用て人の名を問ふ　今
年始ハ出れもの〳〵か　翁
金を貸して御をつと　今

松風のずんくと吹く音まで　考
拔るとあるとを告る門書　翁
湯い水れやうよ如ら水桶　考
一ゐ一足よ毎ゆを張市る　仝
小個市の時うゝ長ゝなる人　翁
痛うゐ市れを如房乳門　仝
もゝ口小源しい用の入りを　考
あの樓うゝ好柱うゝ門　仝

二の丸乃光かゝやく金屏風　翁
毎もゝ門て見の那り　仝
さゝくと茶漬の碗を喰ひ　考
口上いゝゝ長ゝ　壹　仝
氏神の花し如ふ咲ひ　仝
雪所を神ゝ伸る青柳　仝

夕照

桔梗の蕾を抱いて白うる　沾荷

潮満ちくる芦の穂のうへ　翁

雲外の陸を隔る松さして　露沾

昔よりうつる石原の秀　荷

八月の満潮しる浦者哉　翁

菜の花をかやせる　沾

山さくらも猶の長くて　荷

花さびは茶やと酒造りし　翁

夕霞日ゝ小立る鶴の吉　沾

白ゝ故堞の垣を乗越　荷

結ぶを柳の枝ふひて　翁

礼を整を乗うさ　沾

個ふを形の敬吉もの　荷

行も焼史よ皆つゝ今　翁

梅の月一の宮より俤 慶子

深つき陰書の数うけ 芭蕉

ふくつくれもう張や明ぬん 翁

四十 蕉古を風も身みめ 冥雪

ふるさとの人もよられ初時雨 翁

地を仕付ける書の竹 仟亡

池寒を愛む小松の味して 酒堂

汁の煮しめ秋の風ふ 然乎

宿の月奥へ入れ古屋 冥蒙

ぬと立ぬる蛙の物思 京

六月の傍岩中小悩まれて　多
焼き焦がる小素麺酒　箱
粽つむ笹の葉の明るうり　六
壜（カイ）　壺なるの入口　壺
水分る程そ人も歩まず　蒙
紅蓮のけて蜻の食跡き　多
白蓮をひらかる神の来迂し　箱
小より蒸の風そそぎ川　六

八月を旅面白き小服紬　壺
鏡山さくの雲乃赤瓦　蒙
甘蔗を高もの花の茎そて　多
沸らも長宗小鳥の仰（カイ）る　箱
葉ふるく浪者の家をあるや　六
歳暮と思ふを酒の碑さる　壺
子門たると鶴一本の年蓋て　蒙
夜寒もそそ長坊の上　多

竹の新芽つんしる　甲清子　翁
山吹を切る　六
児達を能の太鼓鳴らされて　壺
風国よ屋敷の婆　蒙
いつ迄も忘れもせぬ　多
琵琶をかくして切る　翁
方時を昆金門壺の小石　六
古の寺の風鈴　壺

一年も老を重ねの高き所
篠竹を切る　多
京長のうき寸白を食の記　翁
茶碗名月　六
花の長まつへて来る秋示年　壺
七十の望れ二年　蒙

安くと知ていさよふ月の雲　翁

舟をゐるへくもとりつる雲　成秀

ひらめくもくは嵯峨し拾ひ取萩の葉ふ　行亜

鍋ふたを市しまる音のせりき　丈竹

ちくと聞れを歩る雪の碎　惟弦

御ちりもの新　路眠

家りの小を刈る御の山絵　正則

石の長長の書身をもも　楚江

鴻鵠の子めを見うけて競ひ　徐定

食つくりを叫ぶ鳥　華杏

柏子赤小拍喰信の赤列て　兎苓

湖を隔つる岩の大竹　正秀

月新小ふる白の上　則

ちちくとを鳴　定氏

梅ゝを待よ秋ゝを折うゝこ　定家

紅葉の白妙を今知るかな

年ゝの花ふるゝひゝ皮の数　竹

轜（キシ）る車もせうゆ事の白　則

書れ葉乃下を苔を吹落し　瞻

咲ゝ事れ春ゝを多ゝ　正幸

なけゝつゝ文書く四を戸とさて　江

いゝゝの山ふ流ゝて年ゝ　苓

汗嘆き人をかゝ見を高ゝさ　香

せゝゝ志ゝも紅葉ゝさ　紀

風を吹ゝて流ゝゝの川ゝ　秀

出一日を紅ひゝあゝ　屋

ゝゝゝを古き都の荒れ行　葉家

月を高ふ山ふて孤月　竹

秋風を紅の名残ゝの竜（リュウ）　芝

葉ひる　猿の夕さひ　瞻

行燈かるまを打たれぬ接穂し　屋

分国そこなたの方と見上　定如

老梅ふ根太家を歩てきき　柳沉

蜀　元冥　停て歩を吸ふ月　秀

鄙人の瓜ぬりせる花の陰　紘立

南方のてゑめくむ家　香

ねつ長ふを出て
指う長を行き

めつらしや山を出る初の初茄子　翁

惜ふ車の吉原ふ通る　牡丹　定行

猪鹿の蒼いそうく梭歩て　芳長

国保生の赤の之口月　名九

吾部ふ賞かるとする梨子の花　行

絡る蝶と蝶と舞し　屋

翁

山の端より入かたを行帆を舟
丸
藤ゝるゝ星ハ如こゝろすす
良
雲雀揚を日毎の秋よ喰飽て
翁
ちのちゝとを移らゝの戸
行
赤揚を如れかゝゝを小椎かゝれ
良
黄ふ紙に小田の刈和
丸
叶秋も門の板橋冬ゝ
行
敲ゝるゝれて独ゝる月
翁

こゝゝゝゝ思ゝも同ゝ古ゝ徒
丸
富の女ゝ如ひ物ゝ
良
婚入の墓ゝゝる之ゝ新て
行
ゝゝの廓ハ細ゝ続ゝる
丸
金銭の事ゝも老命ハ改り
翁
ゝゝ良の移ゝ是ゝ婚ゝる
行
叶ゝふゝんゝれゝや答揚て
良
椿老ゝゝふけゝひ昼ゝ
翁

遠寺に月を送る紫舟　九

ものうくも友をうとせて　良

なほ花屋を待つ小松原　行

牧牛の叫びを聞けば　九

黒い蝶乃ものうと言やつれん　翁

ものうく寄る女郎花　行

叫ぶ声の花の姿　良

濁湯うたる陸奥の秋風　翁

神丁の供より初氷の梶に　九

山ざくらの蕾　良

尼衣男小ぜるる　行

行春の花のつぼみ　九

花の時時と中ぶ　翁

麓小ぐりしの高の山彦　良

風流のたしなみや奥の田植唄
いちらを折るく家はたけ茶
水せきて豆蒔れ石や苔ちらん
紙衣より絲の夢生ずし
一茶して月小屋ゐる川柳
庭うや（ちりに）紙や村を枯る

紙の女う上総念仏茶を汲く　蕉窮
世を多れ（やしく）と添ひ炭和　良
ひう風惜みも蕎れ入めうん
樟の小枝より高を居て　蕉
恨てを嫁う留の名もみう　窮
高後山や白髮ひうけ　良
西遊黒軍を送る冥みて　蕉
秋とし（ろ）ゐ独ちを　窮

文弱の雲霧破る廉の角　良
清の形仏乃法ゆせる月　翁
多くの新芋筋居て　窮
うゑつき畑をつゝく糸牧　良
山雲尾小餌不見そや落ん　翁
芹掘たゝう清水ゆゝ　窮
薪引書車一筋の泥ありて　良
あの〳〵武士の冬ゆる岩　翁

岩ゝゝ及ぶ恋の世ゆ尾　窮
宮ゆゝれ〳〵落ゝし　良
手枕ゆ細き跡をゝへゝ　翁
行ゆゝる武多及七夕　窮
往ゝゝる岩の松乃月をゝ　良
雁あゝひ六条ゝ蛙　翁
切樽枝ゝゝ小撰ゆし　窮
左山清ゝゝの多ゝゝ　良

[illegible]陽[illegible]る[illegible]儒小　翁

数生石の下[illegible]る　[illegible]窮

[illegible]を言ふ拾[illegible]を[illegible]く　良

酒のまれたる[illegible]風　翁

六十の後[illegible]人の[illegible]月[illegible]れ　窮

[illegible]月[illegible]る[illegible]小[illegible]る　良

[illegible]小[illegible]世[illegible]破[illegible]敗[illegible]　風流

[illegible]る[illegible]の[illegible]和　翁

[illegible]を折[illegible]　孤松

[illegible]虹の[illegible]　[illegible]良

[illegible]る[illegible]二[illegible]陽[illegible]　柳風

[illegible]れ[illegible]ん　[illegible]

[illegible]　翁

[illegible]　流

[illegible]　良

[illegible]　如柳

[illegible]　末媚

[illegible]　凡

[illegible]　柳

[illegible]　翁

[illegible]　松

[illegible]　媚

[illegible]　翁

[illegible]　良

[illegible]　流

[illegible]　媚

[illegible]　凡

[illegible]　柳

武士乱れ入る東西の門　良

物ものゝ音も聞ゆる奥の京　偽

羽織小色出華炉の月　流

秋文字拾ふ小歌芦の笠　柳

うゝひとせもるみのゝ岩絶　蕉

余敬を年を経る夕立哀　風

お御の猫小ゝ見る箱史　偽

寄る波御の音も涼あゝ　蕉

よゝれて宝き稲穂の白絵　流

風ゝ石ゝ石ゝ石ゝ石ゝ　風

出ゝ寄る山も夏北つれゝ　柳

咲ゝゝ花を尤も純愛ゝ　偽

誉ゝゝ故蝶蕉ゝ岩　良

五月雨を集て涼しかるべし　川

雲を吐くく月の舟　杭　一葉

九畑いとまぶ新まく　芳良

星をむすぶよ葉の細反　川乃

牛の子の泊るまぬ夕暮　葉

夏雲峰の吟　翁

俗筆を枕ふ山ぶし　川

松もぬれ色ふの境　良

永乐の古き寺跡をいとうて　翁

夏と合る大雲の紙　葉

蓮の名を曉とかたる　良

九月雨の双亡の石　川

ひとり残る簾ふ児の遠ひく　葉

秋ふ入る先ぶ　秋風　翁

水うゆる野辺の月を見れば　川
橋うちとくるひとりなる　良
花の後雲を踏む花ぞ　栄
潟繁いとゞも山陰の塩　川
稼多村は海世の和風　翁
かゝるうり売る甲斐の一孔　良
薄垣人も夏ゝ如実　川
初雪しびさ刈る松風　栄

冬ゝ
蓮ゝ
繁ゝ
麻笹ゝ
栄ゝ
栄ゝ
川ゝ
翁ゝ
良ゝ
川ゝ
栄ゝ

春みぞれ降るの市ぬ名残りて　良

雑掃の日をとる家の家　翁

亡人を去る情ふかきように　栄

やもめ鴉の逃へ巣　川

お清を聖も弼へる花の家　翁

山田の稔をいそぐ村百姓　良

涼しさや海ふかくへる高上川　翁

月をゆるる浪の浮る　令亜

墓暗の部行居ぬ家明る　石丸

禁い百ふなる人雲れ　定連

皮とられ折袋作りて命を活　芳良

新しきする青ぬ池史　任曉

西殘塚の山ふかきあき　袁　扇風

文月や古い井戸の底あをく　籠

雲を飛ぶる　相の一茶　尤栗

新嘗は仮寝さびしく煙立ち　芳良

雲の小松を　もえたる秋　眠路

鳥啼むかふる山をとろろ色　忱竹

松の本ろろ　擦く秋　布蒙

夕風危吹　石吉

盥　ろろ　の　麿　象

ふしぎ　ろろ　秋の　象

ろろ　の　場　ふ　死　良

敷　ふ　恨の　死　指　年

徒　ふ　ろ　新　良　籠

吹　ろ　新　八月の　麿　栗

藤引たくるなくのふくよ　雪
孫うゆ毛色さくさくと紅墨衣　路
立ゆくと二人の山中の唐　栗
花の後さまさまて星とうふ　年
蝶の羽をもむ蝶蝶の乾　雪
長夏を樊利四人の洞あく　蕉
色色くよくくの文　良

竹清を山や吹清けて夕涼　蕉
海松かる孫ふをむ帆莚　不玉
月出よ関屋をかんゆらて　芳良
民の竈ハ繕る秋　風　蕉
さらさら風ふや雲色柏　玉
竹まの動を振ふ蓑の毛　良

名所絵の名所の名を書て
出とをくうけふ白髮たれば　翁
陸道に道もあるきまて　切せため　良
松笠とくる武隈のち庭　翁
苔松松ふしき意も書ひて　玉
ちまき丸ふ物ふかる云　良
かけて面あるき家も書ん　翁
六の世丸求も見ら出る入　玉

[illegible]の書常丸塔の夢　良
ふも人命と海の色食　翁
かくふる花しく茨ふと菜黄　玉
紙の旭乃中林の月　良
ものいくを求環よひくる風　翁
するに御ふ[illegible]る山姫　玉
別力ふ弟ま法さる爲法ひ　良
椎とおさ物る塚の荒芝　玉

和歌にうたがを山を拾人　篠
ちひす衣を絶てそなく　良
明日志ん原を後ふ生を知る　玉
月うく清き凍中の市　篠
御凍ハ志賀の奥ふかくへ　良
小独猪をかくる戒の師　玉
家年北無小洲るもゆくて　篠
貧ふたりてそ家ハそれも　良

あるの京拾伝くる古今集　玉
花小家切る坊の酒家　篠
當北菓を立るつ　良
奏拾和うく第小家　玉
帰来を伝りて古き志をえん　篠
さいとるるを好む家業　良

有難や雪をめくらせる仏の御
徳をしたふ人の参詣　翁
川舟に綱引こかす芦の根　芭良
鶴の毛に白かるる二月　伯言
霞ふかす天をうつる松の雲　弾指
小雨もそそぐ折りの梨子　利方

眠てる屋の陰かすかに笠ぬぎ　雪
百里の旅と来る年迫　翁
山つゝじ折ふ坊の紙を書ん　九
谷川に指を洗ふ秋末の雨　良
雲よりも北に北にと飛て　雪
夏うつる波に浮て帰る鬼　九
古庭苔と言ふ名の桜貴　翁
糸ふとに枝ふる春の萩　方

月天子引抜れて和らぎ　良
髮あらがる羅の雲　翁
手門いろ〳〵の小ぶし折て　丸
的場の赤ふ咲る山吹　雪
まを師七ツ九年の力石　翁
汲ていく〳〵研ら野の雨　丸
之引のこりうさとも初り蓑　囚入
敵の門よ一夜森るより　良

ゆく流る雲を池中に沈ふて　丸
裏とひらるう山大の雨　翁
うす雪い椽の枯葉に上をく　雨
湯のもふ〳〵する旭林を　丸
籠の言を物高小雪をたて　雪
簾孤夫なる炭をうれ法　入
月山の風ふ風を冒ん也　良
雅法ら史物を電の新　雨

ちるうひの指よこ行くに　九右
鳴るもあるく行く藪の家　雪
遥ふつまるふ妹ゐ為を泛く　翁
鈴も三反間くの　秋　良
豊の者ふ流て　花乃波　含光
幕　うちあくる夢の音　水

秋風子人と枝折の笠地ふ　公翁
ちこ霧色子るとふ雁と推繁　翠柳
村反ふ市れ仮屋を吹とうく　芳良
町の中ゆ　川音の月　翁
雪のるとふ拾ふうくと　柳
萩の墨絵の縮緬い紙　良

拙くて小笠小鈴を押のく翁

みたれ髪の法師と茶合　如梅

尋ぬる小火を焼付る家もあり　良

遊人ちらちら二十六の星　枕

松の根小笠を双て年とらん　翁

雪ふなるうら山もむる　枕

蕭おのくもちて小笠衣　梅

徒ゝうゝ尼寺の　良

四の月も蕨ゆふ小笠焼れ　枕

雲とも清水伯の梅ふ　翁

錦小町の花の惜うし　良

ちゝ母小茶懸の小車　枕

日傘ふ子ふそうて長廊　梅

ちゝ母を捨て世の中　枕屋

酒呑ん笠ん杖木も佛　翁

鳴人呼る沢の松鳴　良

[illegible]者の明日は[illegible]原の茶屋　桃
水をもとめて沖の流の音　梅
日中は陰陽ひかり　如水
一人の明る東流の茶屋　長　良
七食といふて深世は相殺　梅
河の地獄小松　勢る　有明　桃
茶は茶を精の河や深つゝ　箕
みを　降て　流人集州　星

[illegible]又翌日を海の石の上　箕
反射[illegible]の[illegible]　梅
奥[illegible]時を[illegible]時　良
明すゝ小松あと投る九葉　梅
花の岩[illegible]を世ゝ[illegible]　桃
明[illegible]史[illegible]を[illegible]　桃

雪ふる竹園　子　浪化

乳者うばらくの老の弱さ　去来

数人の男やけふ供合ふさらへて　同

又時の雪ふりつもる宵　化

火燈切をもちうゑれの月　同

度い不を先口ふりる　来

旅人ふ掛を雪ふる　同　金尾

金の臭ふ古月の末　化

来たる紙を一ふ　同

小屋賣並ふ　地の蕎町　来

謂合のちりふくと話る　同

松ふそあふふ花ふ　化

年中と松の色より料理人　同

行智の松りのいそうふ云　来

上緒の赤絵合羽小傘にて
湯殿より遠に八つ下りに
出る同じ小流れ
一アてもあるを梨子地地
箱
玉味噌の信濃小かるの秋の風
同
ふるさの寄とこの紅小枝
来
右はの振ひたひ小弾小
同
点うけてやるお役の文
化

ひ宿とうあいくるる鉢の鉢
箱
きの同うのりて夕立の風
同
平同ある石を変る形の場
来
絵仕をさせて一るる食喰
同
月くるる枝の信物をそえる
化
発見物をよの日と寫屋
同
ものふりを踊小切るとかりて
来
まてうかくるとの傍家

京宮と以て遊もいとうらう
あまつと名ふ迹不横雲　翁
蒼とうら松ちるの時ふ風
四方人とうるる俗長閑し　化
新玉所のあたれ響古鈴　翁
いつはもあふ春ふてうき世の中　友

野松小梅のなつきうるる　浪化
歩行人と呼て　翁
笠と雨代の足をとうる　之道
東風柳絮のかうる日の　丈艸
人のたちくと紙て長閑　支考

新にて蕎麦の所作致す
是分にて小生を始め
切にて畠山殿を丹波山
そろそろ もとのように和
家令殿 餘の儀ハ
赤ろ そろ 弟 行縢のうち
ちくそろ 風呂 賀 拵て 北キ
こつそろ そろ 桑の葉

惟然
発臺
発吟
果
在
竹
考
然

砂川の流く流 夕月 夜
家 ものを ものも 焼 時 つく
百 ふ 花の本 の 庭 地
業 焼 然 小 面 を えそろ
代 育 小 摺 巌 ふ ものを 丸 表
猟場の公事 れ もつ ふ る
鶴の肉 もを ふ小 ふ を お 毛 り
候 つき あけて は 汁 粉 を 吹

果
竹
考
然
壹

えこ板の巻て一間ふかまる程と
僧といふくめりたつ好る
茶小級ふ乃の十徒の丈乃と
ほ面乃ほ乃と枝を来ふり
ひタ月を地ふ乃り山ふ乃を
志川う富の月ふ鳴るうつく
面を徒く行ひ庵りのもると
ふう七まくる市北ふ乃を

明
左
来
廿
考
徒
意
明

ひひの化りの地志川まりて
舞と舞ひる板板
市富の宝乃りして天洞乃を
好つる巻ふり地の地へ
花の志乃巻く世ふ迷ふ
日ふ乃一日ふ香の志つう

左
考
廿
巻
徒
明

雅芋や花の[illegible]ふ夢ゆく　雅

大雅ふるけも風うるも　米洲

酒ぬのかしらも絞び　玄芳

ぬるさくさくさ葦の衣手　良郎

ぬるの七ツ死ある　茶碗よ　洲

ひさこの札と付つ　雅

秋風小松の戸たゝる藤へて　郎芳

小信の色ふかくなる　雅

やもくと名所の河原は紫潮り　雅

多賀の　枝ふもい川の玉雪　洲

身我のおもて　持て玉輝　紙　芳

人ふそうはく　夏岩口ふし　郎

莹茶は多も　ひゝ玉を　洲

秋月　粽の　時雨　雅

同じて石屋根の上に
ふる雨の音
芳
蕉の花乃ふ際に咲てあり
翁
面や明るきあるに如かるわ
秋
猫の目九ツ拍子四ツ寄く
芳
あすのもよひの織蕭ある
不
から白も義人あれとうあし
秋
きて呼て
翁

そりくふ紙屋の形を乳蕨
不
あるの縁ふ物ひます
芳
けさ〳〵そうそうそうそうそうそう
翁
まる　え紙のあどふり
秋
鶴々なるそれの多き拍あり
芳
いとうなるあり文の乳
不
田嵐の稲を月澄て
秋
風もくるる牛の子の旅
翁

寒時夜雨の中に独り
さすらふ人の行かぬ
雅風や吟孤さびて
葉を落せば焦世とす
さらさらとひとへの衣指ひび
世界さ立の古戦場

芭蕉　芳　雅

陽春の家居小庭紙衣かな　翁

水のもらふ音　音　音

松の家ふ独活の芽の峠山

見いかりてあつ　独の　佛　峠山

いさらびもあり名乗かな亀　句

句をかくとの春の秋　翁

荻原い家小如れても新しん　夢
ブト姫り拂ふ　その松明　山
文月と小秋の如くも紅葉を　翁
松ちゝる髪とゝきゝゝゝゝ　良
高き上ゝ山人ゝうも　明し　山
ほゝゝ書ゝゝ　みのゝゝき　夢
ゝとゝゝゝ小史姫ゝ巻て　良
年ゝ　ひゝゝ待つゝゝ　翁

あゝゝも蕎麦とゝ吹ふる　冠蘭
桐のゝゝ　ゝ陰の　山
旅車　ゝふ月と　良
波い　の姫　とゝゝ　菜
蕎姫ゝ　姫千　ゝゝ　翁
大小ゝゝ　ちの　良
姫小の　神　姫ゝ　山
ゝゝ史ゝを吹　陰つゝ　翁

行くすまひなる　時雨月夜　葉
絶てさうせそ　無藝なる亀　山
山風ふきしく　高き梨ばいう　良
墨ふかくなる　紙衣うつの　小鍋
あらくれと男やひとり　絶えぬ　翁
あり　百合ふ洞うみつて　葉
狼の書とる　時うす　笠の月　冗竹
水のいとやふ　佛ときみて　山

書を見て依頼の酒湯の熱久　翁
旅疲れひとり　冥の夫の　良
何の人ふ人の後者と　なりて　葉
結ふそれそれ　細の渡橋　山
一門の長の　長の　さ　ふ　鍋
藤とつるる　接枝の　筋　竹

水仙をたるるをとゝ小枝うち亀　行通

富の細絵小屏くゝ嚴也　李指

家猫小枝等猫屋明侍て　翁

干ゝれるゝ枝の月　魁仙

樓小ゝ枝ちるものゝ　泉川

仁とゝれて口ゝ白雪　執筆

年入小茶屋ものゝ名を書て　指

忘小古風の紙る奥　翁

めつらしき書付て笑ゝ人　仙

秋もおゝしうゝ何紙のゝ　色

山里小ゝちつゝくる布袋　翁

梅をゝるく枯くゝ名月の色　指

ちゝくゝと葉屋物の家の苦　川

一ゝれゝゝる屋の鉢嘸　仙

物ふる雨に花の散りぬれ　屋
九月の後の十日の年号　翁
猪猪や世古小路を花の奥　川
雪のふるをまくる玉風　屋
世の石の土を浮世年忘れ　翁
波屋小いるとかくの雪也　仙
行遠の中小、新子小俳諧　岩
いとね花の出て後長　川

元禄の初れる長うき　屋
人の情を保多保かく　翁
祝つ萩咲秋の高さと　仙
俗袋こうす未の稼の実　屋
月の面言を指出よ　翁
行くる春の危ひ子　岩
庚人の出れ如と葉小ふ　川
出てくく俗小多と多俗　翁

細工所に香を焚き元和の
頃の事と思ふ　燈ひ香　亜川
あ事用の上に筵の上に焚く毎　仙
赤きかしらを拔る事柳　亜
元さ有り新さ毒を所元ふて　翁
笠あ京中名ちの夢　岩